第 1 回国際グリボエードフ会議に参加して

杉野ゆり

第 1 回国際グリボエードフ会議が集合離散とエクスカーションの日も含めて 2012 年 5 月 25 日から 31 日までウクライナ共和国クリミア半島の南岸にあるアルーシュタ市で開催された。アルーシュタ市は、シンフェローポリの空港から車で約 1 時間のところにあり、陽光輝くクリミア半島の由緒ある保養地の一つで、年間日照時間が長く海水浴のできる日数が 130 日ありヤルタ市の 127 日を上回っている。開会式に先立つ 25 日にグリボエードフ像に献花する式典があった。この像は 10 年前の 2002 年 5 月末に市制 100 周年の記念行事に合わせて造られ、やはり同市で開かれた第 6 回国際プーシキン会議の期間中にお披露目されている。残念ながら今回の献花式典に間に合わなかった筆者は 10 年前に撮影したグリボエードフ像の写真をここに掲載することをお許し願いたい。

翌 26 日午前から開会式を兼ねた総会が会場となった郷土誌学博物館で行なわれた。アルーシュタの S.コロト市長、タヴリーチェスキイ国立大学の N.バグロフ学長、ペテルブルクからやって来たロシア文学研究所の V.バグノー所長、クリミア自治共和国古文書保管所 O.ロボフ所長が会議開催の意義と経緯を述べた後、ドイツに本拠を置く『AD INFINITUM』基金の指導者でスウェーデン人の G.レムブケ博士が、偉大な作家であり外交官であったグリボエードフ研究で自治体と研究機関の協力が始まったことを祝した。同基金はスウェーデンとドイツでロシアの移動展派画家たちの展覧会を開いており、レムブケ博士から立派な画集がタヴリーチェスキイ国立大学に贈呈された。博士の友人であるドイツの V.フリッケ教授は美術における移動展派同様に文学者グリボエードフが革新的であったと、28 日の分科会で発表者の中では唯一英語で報告し、アメリカのオハイオ大学から来た A.ブリントリンゲル准教授がロシア語に通訳している。

さて 26 日午前の総会では、ロシア文学研究所教授の S.フォミチョフ氏が会議のテーマである「グリボエードフと現代性」について基調講演を行なう。フォミチョフ氏は、近年同研究所が出版したグリボエードフ全集の責任編集者であり、さらにグリボエードフ事典と伝記を著して、高齢にも拘わらず精力的に研究を続けている人物だが、グリボエードフが『知恵ゆえの悲しみ』だけに終わる作家ではないこと、断片的に残されているいくつもの未完の作品がそれを証明していると強調した。同氏に続いてタヴリーチェスキイ国立大学の歴史学者 A.ゲルツエン氏が発表に立ち、グリボエードフの 1825 年のクリミア旅行日誌に残されている記述とスケッチを論じて、中でも洞窟都市マングープーカレの歯型の塔を持つ壁のスケッチは、塔が保存されていないだけに考古学の貴重な資料になることを明らかにした。確かに氏がプロジェクターに映し出したグリボエードフのスケッチは壁と塔の細い輪郭に注意を払いつつ全体の形を見事に伝えていた。プーシキンやレールモントフのみならずグリボエードフも絵がうまかったとは、浅学菲才の筆者はこの事実を初めて知り、彼らの文筆家としての優れた描写力は、絵を描く力の根底にあって対象を正確に捉える鋭い観察眼によるものであることを納得する。

26 日午後の総会はケンブリッジ大学の F.メルヴィル博士の発表から始まり、博士は 1829 年のテヘランにおけるグリボエードフ殺害事件後、ペルシャ政府が派遣した贖罪の使節団についてエルミタージュ美術館に保管されている絵やペルシャ側の資料に基づいて明らかにするという興味深いものであった。これはペルシャ学を専門にする博士だからこそ可能な研究である。その後、ノヴゴロドの V.コーシュレフ教授がグリボエードフの文学デビュ

ーについて、トヴェーリの M.ストロガーノフ教授がグリボエードフの若いときの文学的位置について、ロシア文学研究所の E.ラリオーノヴァ研究員がグリボエードフの旅行日誌とミツケーヴィッチのクリミア・ソネットを比較してという発表が続く。26 日の最後を飾ったのは、会議開催に向けて多大な貢献をした、地元タヴリーチェスキイ国立大学の L.オレーホヴァ教授の発表であった。教授はグリボエードフのクリミア旅行の行路を辿り、旅行中作家が知識欲に満ちていること、雨にも拘わらずチャトウィルーダク登山を実行し山頂付近の散歩を楽しめたのはグリボエードフだからこそと賞賛した。チャトウィルーダク山は海抜 1527m、半島のほぼ中央に位置する最高峰の一つで眺望が開けている。ミツケーヴィッチも 1825 年 8－10 月のクリミア旅行でこの山へ登り、『チャトウィルーダク』というソネットを書いている。グリボエードフはこの山の羊小屋で一晩泊り、周囲の景色について叙情的な文章を残しており、遠くアルーシュタに停泊する船を見て空気の中に浮かぶようだと表現している。

27 日はバスで移動するエクスカーションの日であった。アルーシュタから海岸線に沿って南へ走り、ワインで有名なマッサンドラのぶどう畑を通過し、イルカがやってくるという黒海の美しい入り江を高速道路から眼下に見下ろして、ラスピンスキイ峠へ行き着く。この記事に付した集合写真は峠の展望台でイリヤスーカヤ山を背景に撮ったものである。その後バスはバフチサライ市へ向かう。バフチサライでグリボエードフが訪れたウスペンスキイ修道院を見学し、さらに修道院と反対側の山の尾根にある洞窟都市の遺跡チュフトーカレへ汗をかきつつ助け合いながら登る。グリボエードフは 1825 年 6 月末から 3 ヶ月間のクリミア滞在中、シンフェローポリとアルーシュタ間の山岳地域、セヴァストーポリ及び南岸の代表的な名所旧跡を殆ど訪れており、彼が健脚で旺盛な好奇心に充ちていたことにつくづく感心する。遺跡から降りてくるとクリミア・タタール風のおいしい昼食が待っていた。昼食後バスはシンフェローポリ郊外にあるカシュタンスコエ村とパルチザンスコエ村、かってサブルィと呼ばれていた土地へ向かう。サブルィにはグリボエードフやデカブリストたちを客人として迎えたボロジン家の屋敷があり、現在この建物には図書館と幼保育園が入っている。ロシア文学研究所はこの図書館に新しい書籍を贈呈した。またパルチザンシカ小学校では教室の一つが博物館に当てられており、第 2 次世界大戦におけるパルチザンの活躍を示す展示に混じってグリボエードフに関する展示もあった。会議の組織委員会は村に関する史料のコピーを同博物館に提供することを決めた。

28 日から 30 日は分科会に分かれて会議が行なわれ、29 日夕方マロレーチェンスコエへのエクスカーションがあった。分科会のテーマは 28 日が「グリボエードフとクリミア」「グリボエードフの伝記及び創作研究の現代的問題」、29 日が同テーマと「グリボエードフの時代と言葉」、30 日が「世界文化におけるグリボエードフの受容」「キリスト教とイスラム教の世界:共存の政治学」で、筆者は 29 日「グリボエードフの伝記及び創作研究の現代的問題」でプーシキンとラジーシチェフについて発表した。最初に、

グリボエードフの時代に属する 2 人について発表を許して頂いたことに対して主催者に謝意を表してから発表を始めた。発表後質問が出なかったが、心理学者で教育関係のヴォルコヴァさんという女性が立ち上がり「遠い国からやって来て我々の気づかなかったことを色々教えてくれてありがとう」とお礼を述べて頂いた。

ところで筆者と同じ分科会に、発表が終わる毎に鋭い質問する新進気鋭の若い研究者 S. ミンチク氏がいた。彼の著書『グリボエードフとクリミア』は郷土の資料とともに先行研究を徹底的に検証して、作家のクリミア・ヒポコンデリヤの原因、デカブリストたちの活動への接触、クリミア旅行が創作にもたらした影響について詳しく根本的に論じている。会議では全部で約 60 の発表があり、発表要旨は『ロシア文学』のクロニクルに掲載されるが、時期と号数は未定である。

さて、このグリボエードフ会議は第 1 回と呼ばれている。「第 2 回、3 回と続くのですか」とオレーホヴァ教授に尋ねたところ、「そう思っている、催しを考えたい」という答えが返ってきた。30 日の総会では会議の総括がおこなわれ、出席した市長が会議をアルーシュタの伝統的な行事にしたいと希望を表明した。アルーシュタはグリボエードフが訪れ、ミツケーヴィッチがソネット『アルーシュタの昼』『アルーシュタの夜』で詠い、ナボコフの詩『名声』に登場する市である。将来もこの市で文学とクリミアを愛する人々の会が開かれることを願ってやまない。

（すぎの　ゆり）